



集英社版 世界の文学

27 ガッダ

アダルジーザ

千種 堅二 訳

サングイネーティ

イタリア綺想曲

河島英昭 二 訳

集英社版世界の文学 27

ガッダ／サングイネーティ

一九七七年五月二〇日印刷

一九七七年六月二〇日発行

訳者 千種堅／河島英昭

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三一六―五  
電話 (〇三) 二三九―三八二

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五―二〇  
電話 出版部 (〇三) 二三〇―六三六  
販売部 (〇三) 二三〇―六一七一

印刷所 中央精版印刷株式会社

大日本印刷株式会社



# 目次

ガッダ

アダルジーザ

千種 堅訳

月夜

5

ジロラーモが止めたとき……

12

クラウデイオは生きることを忘れる

54

四人の娘を持ちそれぞれが女王

62

おかしな噂がベルトローニ家の人びとを悩ませる

85

時間の切れ目

112

船がパラパガルに着く

127

団員百二十人の「コンサート」

141

五月のある宵、公園で

180

アダルジーザ

205

サンディネーティ

イタリァ綺想曲

解説

著作年表

河島英昭訳

千種堅／河島英昭

263

399

414

アダ  
ル  
ジ  
ー  
ザ

ミ  
ラ  
ノ  
・  
ス  
ケ  
ツ  
チ



## 月 夜

造船所の仕事が大へんで、いつこうに知恵が浮かんでこない、知恵が。その一方で、ぶんぶんなる作業のからくりが次々と製品に姿を変え、労働は汗とほこりにまみれる。やがて空には、遠い遠い黄金と、そしてサファイア、まさに慈悲深い眼差しの上でふるえるまつげのよう。横になつて休みながら、なおも起きている眼差し。生命の動悸も、狼狽<sup>ろうばい</sup>しているせいで、険しい道を走るようにさわぎ立つ。夕べの慈愛がわれわれをきよめてくれたことだし、誰かが待っているところを通う、われわれの運命がちゃんと駆けぬけられ、誰からも妨げられることのないように。どうせ、あとで休むことだから。

つややかな木蓮<sup>もくれん</sup>が空でふるえる最初の宝石の光を映していた。だが、あらゆる草木のただ中に落ちたその影は黒ず

んでいった。

一日の終るいま、夜の無限の闇に埋もれる山々の黒い姿や、数々の出来事を考えて下さった方に、さるお方にお礼をしなければいけないというので、ほとんどの草木が祈りの場に集まったかにみえた。夜の中に一段と深く沈んだ背の高い木々がまっさきに考えていた。そしてその次が灌木<sup>かんぼく</sup>であり、若い木々だが、これはまだ草の仲間で、身近くにうっとりする匂いを嗅いでいる。そしてよく茂った草と、仰々しく花をつけた草むらと、樹木族のあらゆる混み入った茎が、大きな木々が最初に持ち出したあの考えを、あらためて引きついでいた。

その認識のすばらしい調和を、全体の祈りのしんと静まりかえった、おどろくばかりの純粹さを破ることができると、思いも及ばなかった。それらの自然は完全に、常にそれぞれの法則に従い、それ自体、唯一の法則の体現者として生きていたが、この法則こそ彼らの唯一の生命なのである。

山の背から、山の黒い谷間から風がはやてのように吹いてきて、その底でごうごうと音を立てている。広い空間へと風が解放されるとき、そこではときどき、もみの木がゆっくりゆっくり息づいていたし、あるいはまた、根のからみあったぶなの木もそうだ。こうして、遠くからでも何も

かも分かった、その悲しみまでが。

何枚かの葉は夢に見る東方の庭のマヨルカ陶器のようで、甘い空ろな星がそこに映っているのが眺められた。ある花冠の芳香の中に、肌を思わす蒼白さの中に、少々憂うつで奇妙な欲望、動揺があったが、これも最初は気がつかずにいたものの、やがて不安に、暗いあがきにと變つていき、とどのつまりは激しく、容赦ない病気に墮する。そうなる病気がいっさいの記憶を封じてしまい、観念どころではなくなってきた。当初、頭にあった意図がくずれていった。昔ながらの規範、試行錯誤の果てに身につけた、幼な子にもふさわしい清純な花のような教えも投げ打っていた。そして、このようにしてわれわれの未来へ向かつて動いていく。分別か認識か、そのいずれにせよ、われわれは持ちあわせていない。

あまりにも疲れたのか、苦悩に打ちひしがれたのか、われわれはあらためて夜の遠い印をじっと見やるということになる。世紀の流れから塔が生え出てきた。透明な天使たちが、月明りのオパール色の構成がボプラのこずえから蒸発し、手を取りあって、夕べの祈りを神に届けに行った。だが、いまは伝えるべきメッセージもなく、着陸地点をあとにして遠ざかって行く、無駄なことには目をつむり、帰路にあたって空しくひろげるアルヴィーゼの帆のように。

ラッパが兵隊たちに、全員帰って、服を脱ぎ、寝るようにと命令し、いっさいの言葉、遊び、足どり、馬鹿な考え、あるいはささやきなどを止めさせる。夜がおそらく気をきかせて、だらだらとつづけさせていたささやきを。闇をつらぬくそのラッパは、たとえどこに行こうとも命令は、上官の命令は有効だと告げている。それはみんなの納得するところだが、みんながみんな聞いているわけではない。夜の中をさまよう人たちもあって、その影は自分たちの違法性をなかなか認めようとしなない。

夜だからといって、必ずしも休めるとは限らないので、目をさましている者もある（何年にもわたって、長い仮借ない雷鳴のように、大音響が山々から聞こえていた。段状の黒いとりでを背景に、もみの林の波状くり型に火花が灯った。闇の中で鉛色になった塔が町のことで悩むこととなった）。

だが、いまはもういない。家と別荘の立方体は、のどかな大地に真理として存在しているのもあろうか、その大いなる甘美さの故に白く、明るく見えていた。東の丘陵からはきつとお伽話の軍艦が着くはずだった、暗雲と巻雲の帆をかかげて、甲板と舷側を暗くしながら。サイレンがトラック道路を遠ざかりつつ、ときどき悲鳴を聞かせていた。近くで見ると、別荘は黒っぽい、たるんだ薄板でふいた屋

根が目につき、その間から塔の生あたたかい壁がつき出ていた。夜の明るさが輝くのをまぢかにして、高く、白々と、まるで周囲の土地を一望する岩のように。ああ、詩の夢よ、大きな犬とマステイフ犬が門の向うでうなっている、通りすぎながら、あるいは鎖につながれ、環をかけられて気ままに場所を変えながら。

びっしり埋めつくされた庭には、ただもうぼんやりした飾りの模様が透けて見え、それに、人がのびのびと横たわれるような、明日の役に立つべく氣力が回復できるようなベンチが見える。あるいは事物と山の一段高い沈黙に包まれている、あるいは影や草むらの中で、まるで走ってきたように紅潮した森の精の食欲ぶりや、追われた海の精の裸の、束の間の恐怖を想像しながら。森の精と海の精はそれぞれに絶え間なく樹液を流したり、あるいは山あいの流れや洞窟のようなところから、しのび泣きながら水を滴らせている。挽き臼に使う石で作った貴重な作品はすでに地衣が上品にひろがって行くのにむしばまれていたが、それはちょうど恋人たちが夜のおかげで、偶然に出会ったところだった。

どんなに繊細なことを感じ、どんなに甘いことを想像して、この神秘の庭の持主たちはここを生ける夢、暗い香りで充たしたのだろうか。宗教的なささやきが夜のさわやか

な息吹きにともなう。そしてもちろん、ある考えが、数多くのその他の考えが持主たちの頭に去来しよう。また、ときには客をむかえたりもする。客たちは海を旅し、遠くの国を通ってきて、ここでひと息つきたい、この暑い、この深い息吹きを吸いたいと思う。

その時間、馬たちは疲れていた。頑丈にこつこつと作られた鉄道が平原をまっすぐに横切り、レールは月の出の近いことを知らせて、銀色に輝いていた。それがやがで、みごとに形作られた黒いアーチの下へ、そして雲を少しいだいた山の頂きへと入って行った。いつものように、闇の中を転がって走って行く汽車の音は全く聞こえなかった。鉄道監視所はびたりと閉ざされていた。だが、門は外されていて、無為のうちに職務を忘れていた。トラック道から来た道がレールを横切っていた。水のゆっくりした流れがポプラに見守られながら、大きな弧を描いて走っていた。鉄道と平行して、灰色の石材で出来たもうひとつの橋がその道をまたいでいる。欄干のついていない橋というのか。水道だ。そこを黙々と緑色の流れが走っている。そして水滴がしみ通って、アーチの下に滴り落ち、道を濡らし、ほこりを泥に変えている。近くの別荘から若者たちが自転車を楽しみながら、その運河のアーチのところにやってくる、そこで少しスピードを落す、というのも、その場のす

がすがしい涼風をのんびりと楽しむには、泥やぬかるみをどうやって避けたらいいか、友人や優しい女友だちに聞いて知っているからだ。冷たい水滴が首筋に落ちて娘は小さい悲鳴を上げる。でも、そのあとはいっしょに遠ざかりながら笑っている。

夜になると、別の人たちが自転車に乗ったり、歩いたりして通って行くが、仕事から帰る人たちで、とりどりの服装ながら、全体に質素である。娘たちは工場からの帰り、髪をひつつめ、少々疲れぎみだ。夕方の緑、黒、オレンジ色はともかくとして、ローカルカラーの装いが無いのはあいにくだ。コルセットも、花模様の古風な長い上着も、巾広の肩掛のようなズボン吊りも、また、黒雷鳥のにせよ、黄金のくじゃくの首のにせよ、あるいは山のポーターから訓練用の標的とされた令名高い別の鳥のにせよ、帽子につける羽なり羽毛なりも、何ひとつないのだ。真珠層の握りのついた短剣なし、長い間珍重される羽毛なし、アラベスク模様の近衛兵のサーベルも、透かし模様の金の腕輪も、バックルもなしで、スペインの風物やチロルの祭りを思わせる靴も、マントも、外套も、飾り帯もなく、そのほか舞台に見るような民衆の偉大さ、風俗といったものもなかった。

綿の中広のズボン<sup>(8)</sup>をはいているものがいたが、これが荒

いビロードのようで、先の方、足首のところが狭くなっていた。また、半ズボンにゲートル姿、あるいは上手な、母親の手作りを思わすウールの靴下をはいているものもいて、「おれに腹のあたりをぶつつけられた方が悪いのさ」とでも考えているように、前かがみで自転車をとばしている。徒歩で進んで行き、夕方だというのに、まだ汗をかいて、粗末な上着を肩にかけているのは喉の乾いた坑夫たち、古い岩を砕いている人夫たちだ。人によっては手が黄色や土の色で、手のひらにはたこができていた。また、ある人の手は酸で皮がむけたようにばら色だ。石灰を、石をあつかっているのだから。染物屋は塩素のせいで、豚肉屋の小僧は塩のせいで手が腫れ上がり、手のひらには常に汗をかいている。汗をぬぐった赤銅色の顔の中には、ひげの毛の間や、まだ年金を受けるほどの年ではないその肌の皺の上に、漆喰<sup>しき</sup>のしみがついていて、白いほくろだ。鍛冶屋<sup>かじや</sup>、機械工、運転手はときどき空色の布地のコンビネーションふう作業衣を着るが、これが後には煤煙<sup>ばいえん</sup>ややすり屑<sup>くず</sup>のせいで黒っぽくなり、大きな油のしみまでついていて、そして彼らの顔は先生のよりもずっと陰気になっていた。だが、それほどひからびてはいない。すすげばもちろん、つやつやして見えるはずだ。青白い月光を浴びたピエロのように、粉をかぶった粉屋のように、石灰の粉で顔を真白にして、橋、す

なわち、大きな天秤はかりから下りてきた若者たち。太りすぎの、はちきれそうな石工に会うことはめったにない。

若者を見て驚かされるのは、まだ華奢な胸部にくらべて、その前腕部と手首が長くて頑丈なことだ。ある者は肌を着ている。それは青や、赤や、グレーや、縞模様で、穴が開いている。肌着の襟にボタンがつくようになっていて、合は、決まるといっていいぐらいボタンがひとつなくなっていた。ズボン吊りは珍しく、大体が少し古びて、汗ばみ、しなびたり、ほつれたりしているし、修理をしたため紐やレースが入り組んでしまつて、この紐の類は残つたボタンとかなり複雑な関係を持つてゐる。だが、中にはお金持に似ているというか、おそらく運に恵まれたのだろう、うんと広く、新しく、パチンコのようにびんと張つたゴムのズボン吊りをしているものもいて、これが人の動くたびに、一瞬一瞬、労役にたずさわつてゐる胸部の熱っぽい、激しい動きに密着して伸びちぢみしている。

その大きな靴ときたら。石工や田舎の労務者たちだが、かかとや、靴底一面にきんぼうげさながらの鋼鉄の釘を打ちつけ、石だたみや石に当ってぎいぎい音を立て、中には歩いてゐるうちに落してしまい、自転車タイヤに穴を開けるものもある。というのも、各人、歩いてゐるうちに自分が出かけて行つたり、存在したことの証を何かと残す

からで、自分ではそれに気づきもしないでゐる。上等の靴もあるが、ときにはあまり上等でない、というか、はき古したのもある。そして靴底がすりへつたりすると、そういうときは、皮を少し使つて、なくなつた分の靴底を埋めあわせる。機械工たちは自転車に乗るときにあつさりした手輕な、スリッパのような靴をはいてゐるが、それでもちゃんと皮の紐でゆわえてある。かかとのついていないのもある。もちろん、かつてはびかびかの靴だったので、祭典で目立つとか、踊りで見栄えがするといったふうに、最初のうちは日曜日の楽しい必要にこたえたものである。ところが、その後、祭日のあとに平日がつづくように、仕事に接し、仕事にぶつかつていくうちに、不格好な筋肉の浮かんだ大きな足が、器の持つ本来の優雅さをゆがめてしまつた。かかとは減つて無くなつてしまい、小指に合わせて靴先が靴の甲からはがれたところは、まるで肉づきのよい足のヘルニアというか。

女たちと娘たちが通つて行く。そして、ときどき、その中の誰彼に男たちや少年たちが声をかけては、また自分たちの考へてゐること、自分たちが所望しなければいけないと思つてゐることをささやきあい、歩き、笑つてゐる。一番大胆なのが回れ右してつまずく。ときどき、誰かが目くばせすると、娘がつつましくそれにこたえる。すると、男

の方は歩きつづけながら、何時間もの疲労のあとだというのに、希望や甘美さに慰められ、心が踊ってくる。自動車走ってきて、鉄砲玉のように追ひぬぎざま、この通行人をかすっていく。男はぎくつとし、ほこりをかぶるが、騒ぎ立てもしない。我慢強い、雄々しい精神は突然の愛着に駆られようが、思いもかけない苦悩にさいなまれようが、道路のほこりやサイレンの怒り狂ったつんざくような音など何とも思わない。その人たちの足どりは、蛙が飛び上かつては、ほこりまみれの溝の中に乱暴に落ちていくところや、そのほか取るに足りないことは無視していたが、それでも、彼らの淡々とした歩みの中に何やら好奇心とかわずらわしさといったものが認められた。

## 原註

- (1) 《Dove alcuno aspetta moviamo》この一文の知識<sup>コグニチブ</sup>下的<sup>コグニチブ</sup>性格に注意されたい。「誰か」というのは性別が不可知論的(つまりあいまい)である。それは艶ごとのふたつの仮定、すなわち女性に待たれる男性、男性に待たれる女性のいずれにも通用する。そのほかにも仮説は存在していて、集会という動機もある。

れば、精神的に優位に立つ者に呼び出されたということもある。そこで、夜の苦しい作業のため、遊びのため、思想や、あるいは利殖の取引のため、あるいは破壊をやつてのけるために、同性が待っているかもしれない。そこで第三、第四の物見高い人や無関心な人たち、あるいはスパイといった仮定についても、あの誰かの公認のあいまいさに対する、sub noctem 闇に乗じ、たわれわれの密やかな追求は有効である。

- (2) 《El nesuno la impedirà》拒否権を発動し、法律の規範を定めたり、(他人に)課したりできる人誰からもという意味で、父親、教育者、警察官、消防官、子もり、教師、聖職者、哲学者、姑、見張りの将校、税務署、ad hoc 特別の監視員とパトロール、さまざまな道徳家などなどが、はつきりいえばマラカイボ知事のことである。こうして、ベルガモの少年は「運が開けるように」ガリバルディーに同行するため、シートを帯にして夜中に窓から下りて行く。一方、別の少年は金具や雨樋をつたって、愛する女の窓へとよじのぼり、蛇のように上がつて行く、ガリバルディー隊の少年が下りるのに生命を賭けたように、のぼるのに首の筋を危険にさらしながら。彼らふたりとも、両親、布教師、知事、復讐者ジョーヴェなどの落雷ながらの拒否権、拒絶に違反しながら。「Allein was die Eltern sagen — widerspricht das volle Herz」

- (3) 《Un fragore è nel fondo》山の急流が谷の断崖のくぼみを、深いところから湧き出てくる音で充たしている。アルプスの谷の典型的な特徴である。この音はどの谷にもいる陰気な精霊というところだ。

- (4) 《Ridecomponeva il preordinato volere》愛の思いに氣

がはやり、落ちつかないまま、哲学書も読まくなれば、教訓的な読書の中でわれわれの中に熟してきたりつばな意図も守らないようになる。したがって、堅固な意思から出た見通し、計画といった類いは一切なかったものと見るべきだ。

- (5) «La cimasa delle abetaie si accendeva di faville» ヴィチエンツァでは暗い夜（一九一六年五月〜六月）にわが方の最後の攻撃が崩壊したが、これが火花（爆発）、威嚇砲火で飾られた形で、敵側はこれを見ながら、イタリヤ戦線への物資補給、援助の打ち切りを検討していた。セツテ・ムーニ高地のアステイコに面した斜面、勾配は日中見ると全く不毛の地だが、頂上はもみの林の黒い縁で縁取られ、それが血なまぐさい高地全体を覆っていた。この「風景画」はヴァレーゼ、ブリアンツァ、ヴィチエンツァをつきまぜたものと考えるべきだ。

- (6) «Tetto di falda scura e lenta» アルプスのこちら側を通るとき、よそから来た人は、この地方の特色として有名な雨量の少なさに驚く。

- (7) «Il tepido muro della torre» 夏の夕方と夜には、西に面した壁は熱が蓄えられているため、ずっと生あたたかいままで、そばを通った人は、生命を内に宿した自然に恵まれたように感じる。

- (8) «Larghi pantaloni di fustagno, ecc. ecc.» ベルガモとヴェネツの坑夫に典型的なもの（一九一〇〜一九三〇年）。「ベルガモッ子」というのは俗語で若い坑夫のことである。

- (9) «Ha bretelle di gomma più larghe, ecc. ecc.» 本物のゴムのズボン吊りは値が張り、自転車に乗る人や機械工が身につけている（一九〇〇〜一九三〇年）。胸全体の動きや緊張、

つまり筋肉を使ったり、それにより刺激を受けるのに応じて、実に敏感に動く。

ジロラーモが止めたとき……

嵌木<sup>カネ</sup>の床をみがくため、カヴェナーギ家にはいつでも「信頼商会」から人が来ていたが、もっとも、これはほかの多くの家でもそうだった。そう……ミラノの良家は……つまり、出張してもらって……。適当な目をえらんで専門の係を派遣してきた。初対面の挨拶をしたかぎりでは年寄りの御者<sup>ゴシャ</sup>、それも、御者席でマントの大きな襟<sup>エリ</sup>に埋まって、じきにこっくりこっくりするような御者に思えたが、その実、活発な、てきばきした愛想のよさが身上だということがすぐ分かった。逃げようのない混乱の中で動くバビロニアの練達の役人たち。べてん師ヘルメスの徒弟の中でも、もっとも聡明で抜け目ない連中。このヘルメスがそもそも令名高い仲間全員と同じ物おじしないタイプである。彼らの内部では沈黙の情熱が、転覆<sup>テンフク</sup>の穏やかな火種が燃

えていた。あらゆるものに目を向ける。目を向けたあと、手を置く。それこそ神のはげましに気負い立ったというか、またたく間に家中そっくり引っくりかえしてしまっていた、腰掛、枕、小テーブル、小さなベッドなど。居間の雜貨屋、客間の市場というところで、鼻面が突き出て、大きな丸い爪をした白熊の毛皮（この爪は研磨機に当てたとたんに、不吉な音をひびかせる）あり、たんすあり、長椅子あり、ルチアーノの揺り木馬あり、らせん模様の柱に乗った見るからにあぶなかしい曾祖父カヴェナーギの石膏の胸像ありだ。それからボンボン入れ、神棚、雌ライオン、振り時計、さくらんぼのアルコール漬けの壺、干し栗の詰まった便器、ベルタニョーニばあさんのカントウ製レース編台、ベッドの下からはみ出ているぐるぐるの巻き上げた絨毯<sup>じゅうたん</sup>とスリッパ、それにこの家の用心深さと愚かさかげんを物語るいろいろな要素がらくたがいっしょくたになっている。それらが最初は宙に脚を上げるように放り出されていたのが、やがて、新しい転倒した道理や、先のことは分からないが、とにかく新しい感嘆すべき修辭法に同調して、整理されるようになった。

みしみし音を立てる肘掛椅子が入口や、四十八手と入り組んで乱れた通路をふさぐために、きいきいとにぎやかに運ばれたり、突如とびこんできた「テレーザの寝椅子」の

四個の車輪を相手に追っかけっこをしていたが、この寝椅子はテレーザのために一八四七年、つまり「四十八」年の一年まえ、わざわざ考えられ、作られた特別のレールの上を走っていて、このレールというのが継ぎ目だらけの、てかてか光った材木、それも、信じられないぐらいの重量を支えるに足るもつとも頑丈な材木でできていた。あるいはまた、このおんぼろ肘掛椅子は、練兵場に展開する息切れた大隊のように、隊列を作って玄関に近づいて行った。おばちゃま大隊である。

もつとも保守的なたんす、もつとも頑固な食器棚のこととなると、すぐに「いやはや、あれまで動かしちまったぜ」といわれるのだった。おそらくほんのわずかだろうが、しかし、それだけのことで、ふつうは手の届かない裏側の「綿ほこり」を片づけるには足りた。

「信頼商会」のこの専門家たちが背中や首筋を走る古い痛みに苦しむのは珍しいことではなく、少々狡猾なところのあるひとりなどは、その首やその痛みの中に「リユーマチの氣」があるのではないかといったりしていたが、「リユーマチの体質」かもしれないし、あるいはリユーマチそのものかもしれない。カヴァロツテイの同時代人であるこの大時代なウンベルトニたちは、そのまろやかな口ひげの下に、何やらピエモンテのブランドーらしい匂いを集

食わせていた。それなのに、家の主人の中には、打てば響く気さくな、元氣なロンバルディアっ子らしいところを見せて、作業のあと、彼らが台所でどう酒をたつぷり注いでもらっているのを大目に見ているものもあった。ひよっとすると、パンや、豚の皮入りのミネストラのごちそうまでついていることもあり、その上、肉やら、あばら骨やらがまだ完全には取れていない骨もはみ出ていて、これがカサルプステルレンゴ、サンナツツアーロ、あるいはヴァレツジョの本物の去勢牛のだった。というわけで、ピエモンテの美德になじんだ例のひげに会えるのもそういう折りだったが、それでも心の広い彼らのこと、家庭的なもてなしに、ひげの濡れるのをいとう様子はなかった。パピロニア王国がその骨を残していったのだ。きれいな、きれいな、全体にわたってきれいなのを。

びかびかに光った革帯を肩から掛けていたが、その尻から脇腹にかけて、いろんな材料や液状のもの（それに蠟、フェルト、麦わら帽子、刷毛）などを詰めこんだ小箱をかついでいて、その小箱は全体にプリンふうの明るい黄色が塗ってあり、そこには少々ごつといところはあるにせよ、人間の魂のもつとも美しい性質をうかがわせる節が興味深

\* 一八四二〜九八年。イタリアのジャーナリストで左翼の政治家。当時の王は名君の誉れ高いウンベルト一世。

く読み取れた。つまり「信頼商会」、アンデガリー街四十二番地、バツターリ街四十三番地、何階、電話番号何々という字が。然るべき時間に、然るべき人物が武器を負い革でかついでやってくるのだった。モップ以外なら、必要なものは何でも持っていた。もっとも、ごていねいに特製のズボンまで入っていた。ひざのところを補強し、前のボタンは70%なくなっていた。

このズボンはもちろん、ふだんはくズボンではなかった。何でもいようなものだが……ともあれ、真正正銘「職業の道具」なのだ。で、家に入るとすぐ、まっさきにやるのは着がえ、もっと的確に言えばその場で、つまり台所の一隅、おそらく一番暗いところではあるまいが、そこでズボンをはき替えることだった(ちょうど石工が建築現場で土をこねたり、すくったりという仕事を置いておき、パラックでやるようにだ)。その間というものの、家の女たちは鍋も放っておいて、別の関心事にとらわれ、衣裳部屋に引きこもっていた。だが、あいにくと、あの些細な、漠とした居心地の悪さがわざわざいして、本来、こういう場合に女性の心のデリケートな感受性にそれこそ甘くついてまわるオルガスムなど思いも及ばなかった。

だが、突然、全く突然に「信頼商会」は無情にも古い家

族を、古い家を裏切ったのである。いや、古いとはいうまい、分別盛りの御婦人方といっておこう。一個五万リラはするようなサルダナパロス王(前六八八〜六二六。アッシリアの王。放つなぜいたくで有名)さながらのめめしいイヤリング(サールガリには「ダイヤの核」と書いてある)を飾って、「ぜひぜひ支えが必要」自分たちの魂を同社にゆだねた御婦人方だ。神よ、あなたの御手にわが魂をゆだねます In manus tuas, Domine, depositi animam mean と。

そのくどいMの音が四十六回も聞こえて、五時四十五分ごろ、かたじけなくも、かしこくも、ほんの一瞬、口にされなくなり、それからおそらく、「庶民の人たち」の「お尻」に對面して、東の間にせよ、ある種の恵み深い謙讓の美德を、さらには少しずつだが、目に見えたねんごろさを見せてうじうじするようになった。ちょうど、高貴なテオドラやカテリーナの視線が自分の前にひざまずいた三文文士に向けられるように、毛皮や宝石で飾った權威の高みから、通行人に恵まれる「今晚は、アンセルモ」という挨拶が雨と降り注いだ。ところが、その後、相手が入口に入るとそのとたん、いままでとは対照的な感覚で、ときには大声でおしゃべりまでして(機会が許せば)、開放的になり、自分をさらけ出すのだった。それはまさに博愛心の湧出であり、古代的な感覚の寛大さだった。でなければ、それはま